【中学校　詩　優秀賞】

島の記憶

浦添市立仲西中学校　二年
比嘉　みなみ

見慣れたフェンス
聞きなれた爆音
非日常の風景が
すでに日常となってしまった
沖縄
私たちの暮らす美しい島
私たちは
基地のない沖縄を知らない
六十五年前の
戦争を知らない

毎日のように
テレビでながされる
基地問題
どこかの国が
核爆弾をつくっているというニュース
親をなくし
泣き叫ぶ子供達の映像
同じ地球でおきていることなのに
自分には関係ない
自分だけは大丈夫
そう言って
見えない線を引いて
目を背けてきた

私たちの住む
この沖縄も
六十五年前は
鉄の雨が降り
毎日数えきれないほどの命が失われる
戦場だった

緑豊かな大地は
むき出しになった土と
人々の血で
赤黒く染まり
青く輝いていた海は
人間の愚かさを
悲しむかのような
暗い色になった

そのとき人々は
何を見て
何を聞き
何を考え
何を想ったのだろう
激しい戦火の中を
逃げまどいながら
大切な人の死を
目の前にして

その場にいたわけじゃない
でも私にだって
分かることがある
大切な人を失う
苦しさ

戦争で得られたものは？
何もない
残ったのは
悲しみと
基地という
戦争の傷跡だけ

今日も
一番平和を願う島から
戦闘機がとんでいく
今日も
どこかの国と戦う準備が
この島で進んでいる

本当は
目を背けてちゃいけないんだ
今
世界でおきていることを
この沖縄でおきていることを
しっかり見つめて
もう二度と
同じ過ちを
繰り返さないように
それが
人々の願いだから
この島と
島に眠る人々の
願いでもあるから